

企画展 いしかわの工芸 歴史の厚み ～加州刀と加賀の工芸～

第67回 日本伝統工芸展 金沢展



《友禅鳳凰麒麟文羽織》個人蔵  
—「いしかわの工芸 歴史の厚み ～加州刀と加賀の工芸～」より—



東京都知事賞《真珠光彩壺》中田博士（石川）  
—「第67回日本伝統工芸展金沢展」より—

■ 特別陳列 加賀藩の美術工芸Ⅰ 【前田育徳会尊經閣文庫分館】

■ 石川の文化財Ⅰ 【古美術】

■ 日本画のてびき 技法、趣向、エトセトラ 【近現代絵画】

■ 優品選 【近現代絵画・彫刻】

■ 優品選Ⅱ 【近現代工芸】

- 10月前半の展覧会
- 10月の行事予定
- 企画展Topics いしかわの工芸 文化の深み ～わざの美 表現の美～

# いしかわの工芸 歴史の厚み ～加州刀と加賀の工芸～

主催：石川県立美術館 後援：北國新聞社

9月12日(土)～10月18日(日) 会期中無休

改めて本展の見所を紹介いたします。第一章では加州刀を展示しています。藤嶋友重や清光が鍛えた刀剣からは、室町時代に金沢周辺に居住した刀匠の高い技術力が伝わってきます。そして、作刀を軸とした金工、木工、漆芸など諸工芸の連携の構造は、武器・武具の製作や補修を基盤とした加賀藩主・前田家の工芸振興政策へと拡充されていきました。本展第一章の趣旨は、こうした背景を再認識することにあります。加州刀といえは、加賀藩の治政下で美濃から招かれた兼若が有名ですが、たとえば清光のように、十六世紀初期から十七世紀後半までの時代に藤嶋系の作風を反映させつつ独自性を打ち出していった刀匠もあり、藩主は伝統を見据える姿勢も評価していました。今回清光は無銘の一口を含め七口展示しており、著名な長兵衛に至る作風の流れを概観することができ

第二章では、古九谷と加賀蒔絵を展示しています。十七世紀前半に、新たな芸術領域の色絵磁器が九州地方で急速に発展します。加賀藩三代藩主・前田利常は、九州の動向を注視しつつ技術の移転を図り、鉱山開発と連動させて加賀の九谷に色絵磁器の生産拠点を確立しました。こうして古九谷が誕生するのですが、絵付けには日本や中国の画題に精通した画人のみならず、九州のセミナリオで西洋絵画を学んだ画人も参画していたと考えられます。

そして古九谷に見られる高度な絵画性の追求は、加賀蒔絵にも認められます。利常が京都から招いた五十嵐道甫は、室町時代から続く蒔絵の名門ですが、法華経信仰を通して本阿弥光悦や俵屋宗達ら琳派の

芸術家ともつながっています。しかし利常は、琳派とは一線を画した、加賀蒔絵と呼ばれる独自の様式へと作家を鼓舞しました。このように、工芸の歴史に銘記されるような独創性の発露が加賀の工芸の特質であり、その原動力は「アンチ徳川」としての江戸幕府への対抗姿勢でした。

第三章では、同様に絵画性の追求が様式の指針となつていくとの観点から、加賀友禅と加賀象嵌鍔を展示しています。また加賀藩が推進した文化による独自性の表明の新たな展開として、大樋長左衛門と宮崎寒雉の名品を、五代藩主・綱紀が金沢に招いた仙叟室好みの観点から最初に展示しています。

## 〈関連行事〉

### ◆土曜講座「加賀藩主・前田家の文化政策」

日時／十月三日(土)午後一時三十分～三時

講師／担当課長 村瀬博春

会場／当館ホール

※聴講無料

### ◆観覧料

一般…六〇〇円(五〇〇円)

大学生…五〇〇円(四〇〇円)

高校生以下無料

※( )内は六十五歳以上の料金、

二十名以上の団体料金。

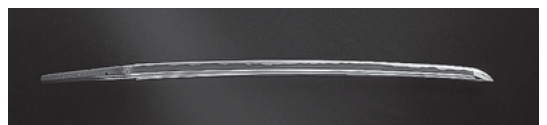
当館友の会会員は団体料金に割引。



《鉛釉獅子香炉》初代 大樋長左衛門



《銀象嵌丁字散文鍔 銘加州金沢住氏政作》氏政



県文《刀 銘越中守藤原高平(花押)》初代 辻村兼若

# 第7・8・9展示室

## 第67回 日本伝統工芸展 金沢展

主催：石川県教育委員会、日本放送協会金沢放送局、朝日新聞社、北國新聞社、公益財団法人 日本工芸会  
後援：富山県教育委員会、福井県教育委員会

10月23日(金)～11月3日(火・祝) 会期中無休

※最終日11月3日のみ17:00終了

### ◆観覧料

	個人	団体 (20名以上)
一般	700円	600円
大学生	400円	300円
高校生以下	無料	

※65歳以上、当館友の会会員は団体料金



日本工芸会奨励賞 《象嵌花器「連樹」》  
村上浩堂 (石川)

我が国は、四季の気候条件に恵まれ、多様な自然環境を形成しています。その中で、各地の風上に根ざした工芸品が生み出され、伝統技術を大切に継承し発展させてきました。日本伝統工芸展は、この優れた伝統技術の保護と後継者の育成、ならびに伝統工芸に対する普及を目的として、毎年開催されるものです。

日本伝統工芸展は本年で六十七回目を迎えます。陶芸・染織・漆芸・金工・木竹工・人形・諸工芸(七宝・ガラス・截金など)の七部門の入選作品五六四点(遺作一点を含む)の中から、十六点の受賞作および重要無形文化財保持者(人間国宝)・持持者・鑑審査委員受賞者の作品、石川・富山・福井の作家の入選作品を含め、約三四〇点を展示します。

東京都知事賞受賞作《真珠光彩壺》を制作した中田博士は、平成二十一年に第五十六回展で新人賞を受賞しており、今回で二度目の受賞となります。優美で緊張感のある姿とこれを際立たせる、真珠光彩の釉薬は当時から注目を浴び、これまでも石川支部展などで入選と受賞を重ねてきました。本作は庭に咲いた大山蓮華から、着想を得て作られたということです。積み重ねてきた技術と、豊かに育まれた感性が花開いた作品と言えるでしょう。

また金工の村上浩堂作《象嵌花器「連樹」》が奨励賞を受賞しています。木々が並び立つ様子を、色と幅の違う金属の線を交差させて表しています。濃淡数色の線の不規則な重なりが生むゆらぎと、シンプル

◆記念講演会「国立工芸館のコレクションと日本伝統工芸展」

講師 唐澤昌宏氏(東京国立近代美術館工芸館長)

日時 十月二十五日(日)午後一時三十分

会場 美術館ホール(聴講無料)

お問合せ先：日本伝統工芸展金沢展実行委員会事務局(県文化財課内)


TEL (〇七六一二二五)一八四一

※事前申込制(メール、FAXのみ)

氏名(よみがな)、住所、電話番号、メールアドレス(もしくはFAX番号)を記載の上、メール(bunkazai@pref.shikawa.lg.jp)またはFAX(〇七六一二二五)一八四一)で応募ください。

(申込締切：十月十八日(日))

申込多数の場合、抽選いたします。結果はメールまたはFAXにてお知らせいたします。



な形の調和が見事です。人間国宝 中川衛の高弟として、優れた作品を発表してきた村上の、新たな一面が垣間見える作品です。

今回石川県の入選者は六十二名、県別の入選者数としては全国一です。本稿で紹介した受賞者以外にも、県内外の工芸作家が受け継がれた技術を研鑽し、作品を発表しています。時を超えた名品が生まれる、伝統工芸最高水準の公募展を、本年度もどうぞお楽しみください。

※新型コロナウイルス感染症感染拡大防止のため、作品解説は行いません。

※最終日十一月三日は十七時で終了します。

《第67回 日本伝統工芸展金沢展会場当番》

10月23日(金)	陶芸部門	10月29日(木)	漆芸部門
10月24日(土)	染織部門	10月30日(金)	染織部門
10月25日(日)	漆芸部門	10月31日(土)	金工・人形部門
10月26日(月)	木竹工部門	11月1日(日)	陶芸部門
10月27日(火)	金工部門	11月2日(月)	木竹工部門
10月28日(水)	陶芸部門	11月3日(火・祝)	漆芸部門

※10～16時に各部門の作家が常駐します。お気軽にお訊ねください。

## 琳派

9月5日(土)～10月18日(日) 会期中無休

今回は、依屋宗達の工房で宗達とともに制作にあたった画家、依屋宗雪に着目します。宗雪が宗達の後継者となり、絵屋の依屋を継いだことは、京都鹿苑寺の住持・鳳林承章の日記である『隔冥記』寛永十九年(一六四二)十一月二十九日条の「今日絵巻枚来、依屋宗雪法橋筆也」から確認されます。つまり、この年に宗雪が法橋に叙任されている事実から、宗達はそれまでに没したか、あるいは引退し、宗雪が後継者となっていたことがわかります。

同じ年に、加賀藩三代藩主・前田利常の四女・富姫が八条宮智忠親王に嫁いでいます。その際に利常は八条殿内に御内儀御殿を造営し、化粧之間、客之間の襖絵を宗雪に描かせたことが、前田家重臣の今枝民部直恒による『今枝民部留帳』に伝えられています。

利常は、江戸幕府の御用絵師・狩野探幽にも重要な仕事を発注していますが、御内儀御殿の襖は、探幽ではなく宗雪に発注し、加賀藩主としての独自性を主張しています。藩士として加賀藩の歴史を研究した富田景周の『燕台風雅』には、宗雪が利常の命により金沢城竹殿(二ノ丸御殿竹の間か)に作画したとの記述があるように、宗雪はその後加賀藩の御用絵師として手腕を発揮しました。

今回展示する『群鶴図』(石川県指定文化財)は、宗達の画風に狩野派の漢画的な表現を融合させている点の特筆されますが、このような新たな表現へと宗雪を鼓舞したのも利常で、その原動力は、やはり「アチデ川」でした。



景文《群鶴図》依屋宗雪(右隻)

## 前田家の名物裂

9月5日(土)～10月18日(日) 会期中無休

九月上旬から展示中の「名物裂」ですが、布の切れ端をたくさん展示しているだけに感じる方もいるかもしれません。今回の美術館だよりでは、古来より人々はどのように舶来の裂を愛でてきたかを紹介します。室町時代末の茶会記の記録には、裂について記されています。

茶会においては、水指・茶碗・茶器だけでなく、床に掛けられる墨蹟・花瓶・花といった空間も重要視されました。墨蹟の表装のうち中廻しに「浅黄金ラン」、一文字には「紺の金ラン」が使用されたことや、茶入の仕覆に「カントウ」が用いられていることが、茶会記には記されています。名画の表装には「金欄」、名器の袋裂には「間道」、いずれも舶来の裂です。名品を装飾

するには、それにふさわしい染織品が選ばれたのです。

特に金糸で文様を織り出した金欄は、その華麗さから中国の宋元画や高僧の墨蹟の表装として好まれました。裂は名品と結びつくことによって、名品の附属でありながらも、やがて名物と称されるに至ったのです。

名物裂の種類は、三〇〇とも四〇〇とも言われています。たとえ小さな裂であっても愛でられ、裂帖なるものも存在しました。前号のだよりでも触れましたが、前田家が所有した名物裂は、国内最高の質と量を誇ります。今特集では、三十一種の名物裂と名物裂で仕立てた能装束一領を紹介します。

《双鳳丸文様金欄(二人静金欄)》

# 加賀藩の美術工芸 I

10月23日(金)～11月15日(日) 会期中無休

前田育徳会尊經閣文庫分館にて開催する特別陳列「加賀藩の美術工芸I」では、国宝《宝積経要品》を紹介し、

《宝積経要品》とは、室町幕府初代將軍足利尊氏と弟の直義、夢窓疎石による写経で、直義によって高野山金剛三昧院に奉納されました。「大宝積経」という経典から重要な部分を抜粋したもので、後醍醐天皇の菩提を弔うために天龍寺が建立されたことに関わりと指摘されています。跋文には、末世に生きる自らと大衆のために利生塔を造塔すること、大乘経典である「宝積経」の説く釈迦の教えを理解し、菩提心をも持つ旨が記されています。

そして紙背には、「南無釈迦仏全身舍利」の一字を冠とした和歌が写されました。詠むのは尊氏・直

義をはじめとした二十数名で、これらの人々に良縁を結ばんと祈願されたのです。冒頭は尊氏による「なにはづの みぎハの波も のどかにて いまハ春へと 霞たつなり」に始まり、続いて直義の「むろのうちち 光ハみちて ともし火の おのか影こそ 又あまたなれ」が続きます。全部で百二十首記されますが、尊氏・直義はそれぞれ十二首ともっとも多く、「なむさかふつせむしむさり」の十二文字すべてを詠んでいます。

《宝積経要品》紙背の和歌が近世以降知られるようになり、はじめ加賀藩三代藩主前田利常が入手を試みるものの叶わず、元禄五年（一六九二）、五代綱紀が金剛三昧院の修繕費寄進を申し出たことにより、前田家に入りました。

国宝《宝積経要品》紙背  
「高野山金剛三昧院奉納和歌短冊」

# 優品選 I

9月5日(土)～10月18日(日) 会期中無休

優品選Ⅱ(会期：十月二十三日～十一月十五日)と併せて、石川の近現代工芸を総合的にご紹介いたします。陶磁と金工の作品はⅠ・Ⅱ期とも通期で展示し、漆工、染織、木竹工、人形はⅡ期で作品をすべて入れ替えます。

展示室の中央に並ぶ独立展示ケースを中心に、陶磁、漆工、染織、金工、木竹工、人形といった石川の近現代工芸を総合的にご紹介いたします。展示室右手の壁面ケース内は、染め上げた布を額装や屏風装に仕立てた染色パネルのコーナーとなります。普段まとまった展示機会が少ないもので、ぜひお楽しみください。

企画展と併せてご覧いただければ、いしかわの工芸を近世以前から近現代まで通覧することができます。展示となっております。

近現代絵画・彫刻では、季節にあわせ、紅葉や果物、実りなどの言葉に見られる彩りの豊かさ、厳しい冬へと向かう寂しさなどからセレクトした作品を展示しております。「白山の画家」玉井敬泉が描く《山の秋》や、下村正一《秋》、藤井肇《こんななまで》、木村珪二《鳴器》、様々な技法による脇田和の作品などをお楽しみいただけます。

「風景」をテーマとした特集展示「くらしと風景」では、人々の暮らしを感じることができる作品や時代を反映した作品、美しい風景を表現した作品などを紹介しています。中村研一《夏庭》や吉田三郎《子供群像》、坂根克介《寄港》や佐々木三六の水彩画などをご紹介します。

# 優品選(第3・4展示室)

# くらしと風景と(第6展示室)

9月5日(土)～10月18日(日) 会期中無休

## 第6展示室【近現代絵画】

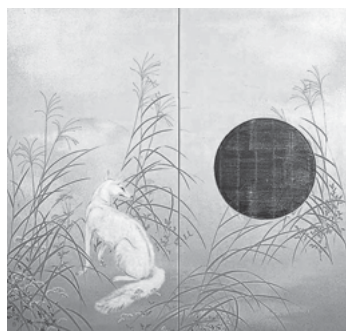
# 日本画のてびき

技法、趣向、エトセトラ

10月23日(金)~11月15日(日) 会期中無休

「ところで日本画ってなに？」  
これが本特集展示のコンセプトです。普段、あたりまえのように日本画と呼ばれるものを展示しているのですが、ふと行き当たるこの疑問。「日本画とは何なのか」などと大上段に構えるのではなく、だれもが知っているようでよくわからない「日本画のいろは」について、展示を通してご覧にいられたと思います。  
日本人画家が自ら描いている作品を、「日本画」と意識するようになったのは明治に入ってからのこと。幕末から明治初頭に水彩、油彩等で描かれた海外作品いわゆる「洋画」が移入されるまでは、絵を描いているという意識はあってもそれが「日本画」という意識はありませんでした。「洋画」が移入され、「日

本画」はその対概念として確立したのです。ちなみにこの「日本画」ということばの出現は、明治十五年にフェノロサが行った講演『美術真説』が初めてといわれています。展示では、このような歴史と概念にも作品を通して触れてみます。  
また、「日本画」を具体的に形づくる、主題やモノについても見ていきます。古来とりあげられてきた伝統的な主題をはじめ、日本人の遊び心ともいえる「見立て」についても紹介します。またモノとしては日本画に使われる画材をはじめ、紙や絹などの支持体、さらには屏風から額装にいたる種々の形態についてもご覧いただけます。だれもが知っているようで、よくわからない「日本画のいろは」をご紹介します。



紺谷光俊《秋宵》

## 第2展示室【古美術】

# 石川の文化財 I

10月23日(金)~11月15日(日) 会期中無休

石川県には、歴史のあるいは芸術的に優れた貴重な文化財が数多く伝えられています。

本年九月現在、わが国の国宝の総点数は一、一一七件、重要文化財は建造物二、五〇九件、美術工芸品一〇、七三五件の合計一三、二四四件となっています。そのうち石川県には国宝二件、重要文化財一三三三件（建造物四五、美術工芸品八八）が所在しています。

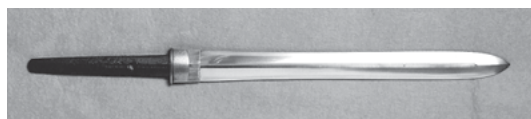
これは、江戸時代に加賀藩主となった前田家の文化的施策が大きな要因の一つとなっており、その歴史的背景を基盤とした今日の文化風土は、芸術・文化全般に対する関心の高さを物語っています。

当館ではそのような文化財、中でも美術工芸品を中心に収集活動を行い、また保存と活用を目的として県内の社寺や個人の方々から多くの寄託を受けて

います。本展は、こうした石川県の貴重な文化遺産の一端を広く知っていただくとともに、文化財保護法に定められた、寺社が所蔵する国宝・重要文化財の今年度の公開を目的に開催します。

また十一月一日から七日までは文化財保護強調週間です。文化財に親しむ機会を持つていただくことを目的に毎年行われているもので、この期間にあわせた展示となります。

石川県には現在二件の国宝が所在しています。当館が所蔵する《色絵雉香炉》と白山比咩神社所蔵の《剣 銘吉光》です。その二件の国宝を同時に見ることのできるまたとない展覧会ですので、ぜひこの機会をお見逃しなく。



国宝《剣 銘吉光》

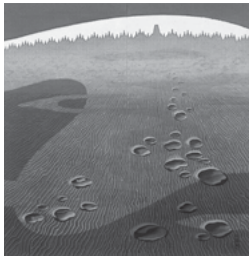
## 第5展示室【近現代工芸】

# 優品選Ⅱ

10月23日(金)～11月15日(日) 会期中無休

前会期の優品選Ⅰより引き続きまして石川の近現代工芸を、総合的にご覧いただくとともに、普段まわってご覧いただく機会が少ない染色パネルをⅡ期と展示替えしながら公開しております。

Ⅱ期のおすすめ作品は堀友三郎《古代を憶う》です。堀氏がインドネシアへ更紗の研究に出かけた際に訪れたポロブドール遺跡の印象をまとめたもので、のり筒でポロブドール遺跡の情景を描き、風紋はすべて糸目糊を引いて、染めと糊置きを繰り返して表現されています。紀元前に造られた悠大な、そして美しくロマンに溢れた遺跡という堀氏の印象が巧みに表現された作品です。昭和四十七年第四回改組日展出品作です。



堀友三郎《古代を憶う》

## 第3・4展示室【近現代絵画・彫刻】

# 優品選

10月23日(金)～11月15日(日) 会期中無休

気がつけば夏の暑さもわすれ、深まりゆく芸術の秋、絵画・彫刻の優品選をご案内します。

日本画分野は第6展示室で特集「日本画のてびき」を開催しているため、「優品選」では当館の基本作家の作品を主に展示します。日本画では、日展で活躍した西山英雄や畠山錦成、院展の梅川三省、上田珪草ら昭和に活躍した作家が基本作家といえます。秋にふさわしい昭和の名品をご覧ください。

油彩画からは浅井忠《農夫とカラス》を紹介し、浅井は工部美術学校でフォンタネージに油彩画を学び、明治三十一年(一八九八)に東京美術学校教授に就任。同三十三年からフランスに留学し、当時流行していたオール・ヌーヴォー様式と出会います。作品からは、油彩表現に日本の伝統様式美の導入を試みた浅井の創作理念が伺えます。



西山英雄《残照》

彫刻からは木戸修を紹介します。木戸は、螺旋構造を主体としたステンレス彫刻の作家で、自作のプログラムや加工器具による複雑なカタチと緻密な仕上げが特徴です。今回展示する《スパイラルリング #3》は、メビウスの輪のようにねじれながら円弧を描くひとつなぎのかたちをもちます。磨き上げられた金属は周囲の風景を映し、変化に富む造形です。ぜひ作品の周囲をまわりながら鑑賞してみてください。

素描では、木下晋の鉛筆画をはじめ、鉛筆や木炭、炭などを画材とした作品をご紹介します。それぞれの画材の持つ力を生かしたモノクロの世界ながら、その表現の幅広さや可能性をお楽しみください。

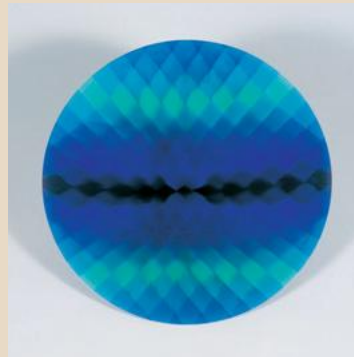
## 10月の行事予定

■土曜講座		13時30分～15時	美術館ホール	無料
3日(土)	加賀藩主・前田家の文化政策	担当課長	村瀬博春	
10日(土)	前田家の名物裂	学芸専門員	村上尚子	
17日(土)	日本画のてびき	担当課長	前多武志	
■映像ギャラリー		14時30分～15時30分	美術館ホール	無料
4日(日)	「作家シリーズ 創作の原点 日常へのまなざし」 「世界・美の旅 ミレー ～種まく人は今～」(30分) 「シリーズ北陸の工芸作家 石川の匠たち」(50分)	フェルメール/ロックウエル(30分)		
18日(日)				

会期：令和2年11月8日(日)～12月20日(日)



三谷吾一《海の詩》



三代徳田八十吉《耀彩鉢》



二代浅蔵五十吉《釉彩華陽鉢》



木村雨山《麻地友禅瓜模様振袖》



初代魚住為楽《砂張銅鑼》



松田権六《松蒔絵飾箱》

次回の展覧会

令和2年11月19日(木)  
～12月20日(日)  
会期中無休

	前田育徳会 尊経閣文庫分館	第2展示室
	加賀藩の 美術工芸Ⅱ	石川の文化財Ⅱ
第3展示室	第5展示室	第4・6展示室
人物画の世界 【近現代絵画】	きらめく美 北陸ゆかりの截金作家たち 【近現代工芸】	優品選 【近現代絵画・彫刻】

ご利用案内

コレクション展観覧料

一般 370円(290円)  
大学生 290円(230円)  
高校生以下 無料  
※( )内は団体料金  
10月5日は第1月曜により  
コレクション展示室無料の日

10月の開館時間

午前9:30～午後6:00

カフェ営業時間

午前10:00～午後6:00 年中無休

10月の休館日は  
19日(月)～22日(木)

「石川県立美術館だより」に広告を掲載しませんか？

石川県立美術館友の会会員、石川県立美術館協力者、  
県内各行政機関及び文化施設、全国の美術館・博物館へ

郵送配布!! 3,000部発行

ターゲットを狙った  
知名度向上

県立美術館発行の  
信頼度の高い広報媒体

お問い合わせ ☎092-716-1401

株式会社ホープ 福岡県福岡市中央区薬院1-14-5MG薬院ビル7F  
東京証券取引所マザーズ上場 福岡証券取引所Q-Board上場 財源確保 検索

石川県立美術館だより  
第444号(毎月発行)  
2020年10月1日発行  
〒920-0963  
金沢市出羽町2番1号  
Tel:076(231)7580  
Fax:076(224)9550  
URL <http://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/>

石川県立美術館は電源立地地域対策  
交付金を活用して運営しています。